

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	風雲録
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 77: 131-146
Issue date	1900-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5518">http://hdl.handle.net/2298/5518</a>
Right	

嘗て一たびも、閱覽室と云ての閱覽室を知らず、只僅に一兩度、体格検査室としての、閱覽室に入りまことあるのみの、呑氣の人鮮なからずと、嗚呼圖書閱覽室は、しかく敬して遠ざくべきものか。行けよ行け閱覽室に、無益の談話に費すの時を利用して、閱覽室に入りて、正課以外、莫大の知識を與ふる所の書を讀め。閱覽室もどより、雲煙過眼視し輕々視すべきものにあらずと雖、又、しかく敬えて遠ざくべきものにあらざるなり。

## 風雲錄

### よき藻の草子

もゝのやのれきな

いとよき人の、きたまふなる、いとよき衣は、いとよきはどりの、いとよき糸にて、いとよく織りたらんこそ、いとよかんめれど、すてゝよきもの惡くてよきものなほは、いとよきはかせの、いとよき文にて、いとよくかきたるものならずとも、と思へば、筆のまにゝものし侍りぬ。見ん人よきに見給ふぞといふ。

小さくてよきものは、木の芽。花なども、蕾なるはどよき。小さき稚兒の、紅葉のやうなる手は、いとうつくま。何も何も小さきものは、と納言がいひしは、げにさるものにて、一々あげたらんには、つくる所かるべからず。書生の抱負の小さきも、またなくあはれならんかし。

太くてよきものは、

志は大ならんことを要す。家の柱も大きなをよき。力士の体、はた大なるに若くなま。書生の腹の太きは如何あらん。

たゞきてよきものは、

砧。大鼓。げす仲間の無駄口。餅など喉にかゝりて、苦める人の背中。食堂の戸。

とりてよきものは、

果物の皮。豆の莢。梅干の實。ちり塚のちり。下駄。箱浴室の草履。廊下のランブ。友にあひて帽子とらぬは、氣高く見えていみじうよし。

わりてよきものは、

栗のから。薪。火鉢にあまるほどの大きな炭。食堂の皿と茶碗と。自習室のランブ。

すてよきものは、

ちり。米の中の稗。十のものに、四つあるをば拾つべし、これを四拾といふ。名はずつども、利を捨つべからず、これを悟入といふ。

悪くてよきものは、

人の通はぬ山道。書生の服装。學寮の炭は、燃はたつばかりにうちけふりたる、飛ひちるばかりに碎けたるこそなかくにけれ。

多くてよきものは、

智慧。實。富みたる親戚。親なき友。雜誌の原稿。惡口の多きは如何あらん、覺束なくとられそろしければ、こゝに筆をおさつ。

### 浪鷗に代て一言す

浪鷗が『うたゝ寢の目さまし』前號に出てしより職員生徒間の彼此議論あるよしを聞く、浪鷗の精神は左まで毒氣を吹かんとの積に非ざりなり、諺に飛ぶ鳥跡を濁さすと云ふ、浪鷗今や已に飛ひ去ると雖も、亦其跡を濁すことを欲せざるなり、雜誌部委員に於ても若し浪鷗の筆を以て皮裡の陽秋と見做さなは、固よりこれを風雲錄欄内に掲ぐべきなり、何を以てか校内の陰事を

摘發せ、生徒間の宿弊を暴露したるものを故らに遠慮まで雜誌欄内に載するの愚を學はんや浪鷗の腹には固より劔無きなり、唯浪鷗の筆に蜜無きを以て、端無くも諸賢の疑を起しゝなり、然れども浪鷗の精神已に斯の如く、又委員の精神も此の如くなれば、讀者に於ても其筆の統熟せざるを責むるは可なり、其意を責むるは寧ろ刻、諸賢何を毒を轉して藥と爲すの方を講せざるや、

（耽々生）

### 硯友會に就きて

硯友會の昨今果して如何と。今や硯海の水は、涸れ盡して、一個の水たになきなり。會員の詩想は湮滅して影たになきなり。嗚呼浩蕩として際涯なかりし詩海は、いつまか桑田と變じぬ。涓々とて、間斷なかりし歌泉は、いつまか其跡を絶ちてぬ。されば今や硯友會の名は、漸く自滅まで、會員の腦裡をはなれ、幹事の胸裡を去りて、斯會の氣息喘々焉、これに代りて、氣焰をはけるものは、紫漢吟社なり。彼は實に、この雜誌の文苑内にはびこりて、紫の色深く咲き匂へり。これにけおされ、薄墨の眉にこもりて、色もなく香なきは

これ、硯友會の現時の情態にあらすや。起て上硯友會の文士、奮へ上硯友會の幹事。醉生夢死は男子の本領にあらす戸位素餐登君子の志ならんや。

從來、此會員を率ゐて、詩歌文章の道走るべせられ之黒本教授は、越路の雪見んとて、故郷の空にかへられぬ。さらでだに活氣なかりし硯友會は、こゝに一大頓挫を來せるものゝ如し。嗚呼硯友會の衰へたる、何ぞそれ甚きや。

硯友會の幹事よ、兄は何ぞ惆悵とぞて、獨り悲める。硯の水は、涸れたるにあらすして、凍れるなり。會員の詩想は、盡きたるにあらすして、潜めるなり。氷は漸けて、涙は舊昔の鬢を洗ふの時、兄も亦筆硯を洗ひ、會員を一室に會して、共に雅懷をやれよ、力を盡して此會の挽回をはかれ。起て上硯友會の幹事。

黒本先生去りて、後任未だ定まらず。現任の國文漢文の先生、又這般の事に出さるゝ閑なし。顧みれば、斯會の負へる任や大なり。和歌の改良漢詩の研究、新詩の振作、共にゆるかせにすべからず。噫、喜んで、此任にあたり、活潑々地に文壇

に活動して、大に吾人の指南たらん人は、それ得難きか。吾人は一師を得て、此の硯友會を玄て、よくその目的を達せしめ、隆盛の域に至らざることを、切望してやまざるものなり否、我校をして、よく其の國文教授の職分を完うせしめ、以て天下に誇るに足るべき學校たらしめんことを、切望してやまざるものなり。吾輩に一小硯友會に就いて喋々呶々するものならんや。

（破硯）

彼れに従ふを止めよ

吾人既に論説欄に於て、名分を知らざる可らざるを論せり。彼れの正朔を奉せざる可らざるの理由なきを辯せり。而して我が紀元は、必ず奉せざる可らざるを述べたり。思ふに吾人が意見は、略ぼ諸君に了解せられしならん。されば、再びかくることを繰返すの要は、殆ど無きが如し。然れども、遠きを知て、近きを知らず、二股を見て、曲部を見ざるは、智者と雖も、時にある所なり。吾人は、其稀にあるものなりてふ爲めに、筆を擱きて、述ぶる所なきに忍びず。願くは、本校の或る現象に就て、少くも不服を漏らさしめよ。

或る現象とは如何、諸君が意識的に、或は無意識的に、耶蘇紀元を獨逸書取の紙端に書して、顧みざることは是れなり。尤も各部皆な西洋人の書取あるに非ず。是れ固より故なきに非ず。かの洋人が、黑板に模範を示すを以て、諸君が之に倣うて然かする所以なることは、吾人の認知する所なり。然れども、日本男子たるもの、西洋人が模範を示せばとて、是非をも辨別せずして、直に之に服せざる可らざる乎。吾人は諸君が決えて爾く自ら輕ぜざるを知る。然らば、彼は師なり。故に師の命には従はざる可らずと謂ふ乎。吾人は諸君が名分を誤るも、猶ほ外國教師の命に従ふの愚を學ばざるを知る。然らば、外國語を學ぶが故に、之に従はざる可らずと謂ふ乎。吾人は、諸君が其の國語を學ぶが爲めに、併せて其の正勳をも奉ぜざる可らずといふが如き、悖れる意見を立てざるを知る。嗟乎、吾人は實に諸君が彼れに従ふの理由なきを悲まざるは非ず。理由ありて従ふは、稍々可なり。理由なきに、泛々然とて、彼れに従ひ、寧ろ得々然たるは何ぞや。彼れ外國人の、其國の紀元を奉するは、固より當然の事なれ

ば、吾人は決えて、彼を咎むるものに非ず。否。咎めんとするも、咎むる能はざるなり。故に彼は彼とて、耶蘇紀元を黑板に書せざるべし。然り、如何なる大文字を以て、書するも差支なき。諸君は何故に斷然之に顧慮するをやめて、日本紀元を書せざる。若し未だ斷然たる處置をなすの勇氣なしと語は、吾人は誠に龍南健兒の元氣消耗を歎せずんば非ず矣。噫。

(秀岳)

## 第五高等學校生徒間には 敬禮なき乎

敬禮の廢棄せよは、今更のことに非ず。之に就て多少議論を試みたるものも、一人にわらず。而も些細の功なくして、却て甚きを加ふるのみ。あゝ、敬禮の廢棄を恢復せんと欲して、辯論を費すものは、竟に縊者を救はんと欲して、其足を引き縊をえて益々急ならしむるが如き愚人なるか。吾人は決して然らざるを知るなり。然るに毫も警醒救助の功なきは何ぞ、是れ辨者の議論薄弱なるに非ずして、聽者其人の冷淡なることを證明する所以にわらずや。同情なきことを表示する所以にわらずや。あはれ、熱心なる聽者はなき

か。同情にまで心を破る人はなきか、或るものは第五高等學校生徒間には、敬禮なきかど大呼するに。

已ぬるかな。高等學校の生徒や。天を仰で濶歩するを知るのみ。肩に風を研て疾走するを知るのみ。人を睥睨えて、得たりとするを知るのみ。時に帽子の古き人に遇うて、敬禮をなすものあるのみ。同縣人に遇うて、莞爾たるものあるのみ。同室員に遇うて、苦痛ながら、頭を下ぐるものあるのみ。已ぬるかな。高等學校の生徒や。と歎ずるものあり。余之を叱めて曰く、咄、汝痴言を漏す勿れ。高等學校の生徒は、三四年に亅て、何學士とも云はるゝ御方なれば、氣位の高きは、理の當然に非ずや。とかの氣位高き御方は、余が叱咤の言に對して、快哉を呼ばんかな。

（秀岳）

吾も亦君が叱咤の言に對して快哉を呼ばんかな  
（二狂生）

## 試験と平素

人生何者か學生の境涯より榮えきもの有らんや  
學校の正課をおめれば、三三五五相携へて、瓢然

として、龍田山に登ぼり、水前寺に遊び、花岡山に攀ち、本妙寺に詣で、日暮るゝ迄、杖を廻らすを忘れ、或は下宿屋の樓上に、唾壺を破て放歌高論を、夜の更くるを覺えず、或は學寮の寢室に横臥して、邯鄲の夢を結び、一晝一夜を寢明かえて、今日日を取違ふ。書庫は蜘蛛兒の巢窟となり、机上に散亂せる書籍は、塵埃に擁せられて、手もつけられぬ有様なり。人生何者か學生の境涯より潔白なるもの有らんや。社會人間の、卑屈なる行爲を學はず、陋劣なる心事を解せざるなり。人生何者か學生の境涯より吞氣なるもの有らんや。錢は勞せずえて之を父兄に得、言に責任なく、行に制裁なし。意の向ふ所これ行ひ、心に思ふ所これ云ふ。是を制するもの有れば排斥を、是を難するもの有れば辨論す。人は云ふ、學生の時代は、人生の花の時代なりと。余は實に其然るを信するなり。而も是終の一學期の前半期に過ぎざるなり。

若し夫れ、試験眼前に迫まれば、終日机を離れず終夜衣を脱せず、かゆを食ひ、茶を煮して、徹夜書を讀むと幾日、顔色蒼白、膚筋枯樵、肉落ち骨

出てゝ、氣息奄々たり。人は言ふ、學生生涯は、人生の最苦涯なりと。余は實に其然るを信するなり。然れども是唯後半學期の末二旬に非ずや。

學生の生活、固より樂からざるに非ず。然れども焉んぞ苦なからんや。夫の一概に評えて、人生の最も愉快なる、花の如き時代と云ひ、或は人生の最も苦痛なる時代と云ふもの、固より皮相偏見の説たらずんば有らざるなり。夫れ學生の時代は、修養の時代なり。素より、安閑悠遊として、經過す可きに非ずと雖ども、亦焉んぞ苦困一瞬の閑なしと云ふ可けんや。然るに直に前半期の状態を見て、以て之を評え、或は試験前の數日を捉へて、以て之を論定せんとするは、素より不可なり。思へ、苟も業と稱するもの、何者か多少の苦有り、樂有らざる者か有る。今此處に二人の勞働者有り、甲吸々ときて、終日業を勵み、乙は安閑とて座食え、連日業を抛棄するどせんが。平素の状態を以て、直に之を評する時は、甲は苦にして、乙は樂なるが如しと雖ども、一度節期年末に遭遇する有らば、苦樂の境遇直に、其の位置を轉換し、和氣靄然とて團欒し、以て一家の和樂を

歌歌するものは甲の家なり債主相睡て門に到り主人は踪跡を失え、妻子は凍餓に苦むものは、乙の家に非ずや、我が學生間に於ても、亦斯くの如きの觀無くんば有らず。見よ勉強家は紋々とて毎日其學料の精讀復習を怠らず。教場に在ても、亦嘗て教師の間に應答せざるはなま。人は之を以て書物虫の綽名を與へ、幽雷兒の惡口を爲す。曰く、彼は學生らまき快活と元氣なまど、自から快男兒を以て氣取り、磊落漢を以て任じ、菓子屋乃至牛肉屋の樓上に高歌放吟し、一厘半錢も是盡く父兄の膏血なることを忘れて、自から金拂の奇麗にして而も吝ならざるを衍つ。而して學期試験眼前に迫まるの時に當り、悠々として考に應じ、陰然とて全級に雄視するものは誰ぞ。一憂一懼、目寢て心眠る能はず。容貌憔悴し、遑々として及第を苟偷せんとするものは誰ぞ。吾人學生、多くは此歴史を繰り返へすもの。而して更に以前の△歴史を繰り返へすものは何そや。何れか是、何れか非、孰れか苦、孰れか樂、固より言を待たすまで明なり。而きて、尙は憤起一番一大曲折を爲さる者は何の故ぞ。自から探して、

高等の思慮有り、智識有りと云ふもの、尙ほ遂に目前の小苦を忍んで、期末の愉快を收得する能はざるか。期末の大困難を豫想して、今日の苟安を犠牲とするに能はざるか。一學期の事固より小なりと爲さず。之を大にまては、一學年の落第となり。更に大にまては、一生涯の失敗に歸す。今にまて改めずんば、駟馬亦遂に及ばざる可し。

(想筆)

## 續々學寮五分論 (政治的觀察)

紫洋生

民主制、君主制、室長論寡人制、政体に關する二種の見解、寡人制と五分案との關係、

今や讀者の本論を見ることが猶世人の臺灣嶋に於けるが如くならんとを恐るゝと雖も、言ふて其意を盡さざるも亦讀者に忠なる所以にあらざるを以て、更に前二篇に略せし所を補はん、余は正論及び續論に於ては五分の利を説くに主として豫想せる結果を以てし、隨て其觀察も全く社會的に偏したりと雖も、斯かる議案の重大なる觀察照は寧ろ政治的方面に於てのみ、さの閣を作るにありと雖も、責任内閣一たひ成るや

み、故に本論に於ては五分案が學寮統治上如何なる地位を占むるかを攻究すべし、

學寮統治上の攻究をなさんと欲せば勢ひ其政体を論ずるの要あり、政体に種々あり、曰く民主政治、曰く君主政治、曰く寡人政治是なり、進歩黨の名士即ち説て曰く、學寮を治むるは民主制に依らざるべからず、吾人は既に丁年に達せ正に高等の教育を受く、社會に出で、其木鐸となり、自治体の一員とまて其牛耳を執るべきは二部と三部とを論ぜざるなり、況んや社會公共の思想を養ひ、各員をまて責任の自己の頭上に懸れるを知らまめ、令せずして行ひ、禁せずまて止み、以て彼等をして自由の美德を享有せまむるが如きは民主制にあらざる望むべからず、學寮會議員は寮生之を撰び學寮の主權を握らざるべからず、常議員は學寮會之を撰び凡百の機務に當らざるべからず、選舉は普通を可とま議は多數に決す、舍監の如きは點檢と書簡の配布とを依託すれば足れりと、蓋し進歩派は英米自由の學説を汲めるものにして其目的とする所は責任内閣を作るにありと雖も、責任内閣一たひ成るや



責は良民に負はずして却て一部の漁權獵官の徒にのみ負へるが如き、争は主義の争にあらずして唯利害感情の争に終るが如きは史上其例に乏しからざるを見れば論者の言ふ所も何處にか欠點なきを保すべからず、欠點の探究は興なきにあらざるべきも、今日此制を採ること能はざるは別に理由の存することなれば、あたら骨折も唯に無益の惡口とまで進歩派を害するの外何の益する所もなかるべし、

次に自由派の策士揚言えて曰く、學寮を治むるは君主制に依らざるべからず、即ち密に劃策すらく、吾人は知るの時代にして未だ行ふの時代にあらず、吾人が本務は學業にあれば學業以外の俗務は可成之を避けざるべからず、且つ舍監を度外視して血氣の徒に主權を握らしむるが如きは争亂の起因たらずんばあらず、變遷さどきは禍大なり、變速かなるときは禍小なり、寧ろ事端を開くのを犯すも禍を小にして學寮を救ふの勝れるに如かむや、舍監は舍監として令せざるべからず、寮生は寮生とまで従はざるべからず、室長の撰任は寮生の意見を探るも寧ろ舍監

の薦學を主とし、學寮會は之を存するも固より諮詢の類たるべしと、蓋し自由派は其黨名に關せず獨乙流の新學說たる主權說を執れるものなるにより、其論據率とまで拔ぐべからざるものあるに似たり、而も理論と實際とが若し違ふ事ありとせば、政治社會は當に之に属すべきを以て、吾人は獨乙の主權說によりて所謂自由派策士の經營を直に是認するの大早計なるを看過する能はざるなり、

夫れ策士が舍監を舍監として令せしめんと欲するや善矣、寮生を寮生として従はしめんと欲するや亦善矣、而も室長及び室長補四十二名をして政治的及び社會的方面に於て有耶無耶の間に埋沒せざるに至りては甚だ解すべからず、蓋し四十二名の名譽職は經驗に於ても技能に於ても優に學寮の基礎ともなり柱石ともなるべきものなるを以て、政体の如何に關せず之に依りて以て學寮の統治を行ふべきは論なきのみ、換言すれば室長は土舍監に心服し、下寮生を擁護せ、寮生よりは兄と見られ舍監よりは長子と見らるべき筈なり、故に室長は舍監の令を先づ自ら實

行きて之を寮生に行はせむると等しく、寮生の意見も亦是非を審かにして之を舎監に陳せざるべからず、然るに自由派策士の劃策する所は徒に進歩派の説を破るに急なりしを以て、又室長を利用するの暇なく、唯舎監の嚴令と寮生の違奉とを以て綱領とせたるの結果或は墮落せる政黨が政府と提携して盲從に陥るが如き醜態を演ぜざるを知らむや、余は固より服從を忌むものにあらず、而も服從と盲從との間の區別を嚴にせんことを望むや切なり、何となれば盲從せる室長は疑もなく無能の室長にまて、無能の室長は固より寮生の兄とせ舎監の長子とするに足らざればなり、

然らば室長をして悉く寮生の兄舎監の長子たらしむるの法あるか、曰く有り、寡人政治是なり、彼の君主制乃至民主制の如きは頗る進歩せたるものなりと雖も、之を直に取りて學窓に用ひんとするは寧ろ過ぎて及ばざるの感なくんばあらず、蓋し學寮は吾人が住所なり、住所は兵營と異なり又終局の社會と別なり、君主制の起るや兵營の思想よりま、民主制の成るや社會の思想より

り來る、而も學寮は實際社會の如く複雑ならず、又兵營の如く嚴なるの要なき、強ひて複雑ならまむるは亂を招く所以なり、強ひて嚴ならまむるは姑息に陥る所以なり、余が所謂寡人政体なるものは、學寮を以て吾人が愉快に學事を修むべき住所となし、繁を避けて簡に就き、規則を主とせずして德義を主とするにより、亂を招き姑息に陥ることなくまて、氣を昂め風を和かにするの益あり、乞ふ寡人政体を論せん、

凡そ政体なる語に二様の見解あり、一は政務を議決する時に於て名け、他は輿論の源泉に於て定む、第一の見解は普通用ひらるゝものにして『支配し得る』を根據となし、第二の見解は余の假設に係り『支配する』を標準となす、支配し得る人必ずまも支配する人にあらざるを知らば二者の別自から明かならん、第二の見解に従へば君主國にまて寡人制なることあり、又共和國にまて君主制なることもあり、ベルシヤ戰爭後の希臘は民政なりと雖も政治は悉くベリクレスの方寸に出で、プロシヤの政体は立憲君主制なりまもビスマーク、モルトケ、ルーンの合意せま

所は老帝の詔勅に出で、復國會の協賛を要せず  
ビスマーク曰く戰ふも不可なきか、モルトケ曰  
く大丈夫、ルーン曰く然り然り、普佛の開戦は亦  
宣戰の詔を待たず、既に業に三傑の會談に決  
せられしにあらすや、余が最上の政体と信ずる  
は即ち此種の見解に於ける寡人政体にして、普  
通の見解に於ては其君主制たるを民主制たるを  
問はざるなり、故に進歩派の所謂民主制及び自  
由派の所謂君主制に於て若し此意味に於ける寡  
人制たることを得ば誠に結構の事なりと雖も、  
余の見る所に依れば共に此要件に適せず、唯  
前年以來の宿論たる學寮の五分に依りてのみ之  
に達することを得べしと信するなり、  
何故に民主制は余の所謂寡人制たる能はざるか  
換言すれば何故に常議員の存立は困難なりと云  
は少く學寮の歴史を知る人は當に知るなるべ  
し、何故に君主制は余の所謂寡人制たる能はざ  
るか、換言すれば何故に現時の室長連に中心を  
生じて議案に決する能はざるか、是恐らくは室  
長諸君の解釋に苦しまざる所ならん、蓋し二年  
の日月は能く同部内の人々を知ることを得るも

未だ他部の人々を知り悉くこと能はず、現時の  
室長四十二名は各部より集めたるもの、故に室  
長は互に他の室長を知らざるか若くは知ると  
不完全なるかに屬するを以て、學寮會は恰も新  
設の殖民地の如き光景を呈し、智者あるも深く  
謹んで言はず、愚者あるも固く取て下らず、一見  
すれば第二の見解に於ける民主制の如き觀ある  
も、實は何さへ爲すなき烏合の集たるに座せざ  
るか、是室長の罪にあらすして實に君主制度直  
接統一主義の罪なりとす、  
而して能く此間の消息を解するものは、亦何故  
に五分せる學寮が能く余の所謂寡人制を生ずべ  
きかを解するを得ん、試に學寮を五分せよ、其  
片たる或る分科寮の室長は悉く同部の同輩なる  
を以て、學寮日々之の出來事乃至最も微細なる利  
害便宜等に關しても、別に學寮會を開かずとも、  
毎に談合協議することを得るにあらすや、入れ  
混ぜ四十二名の中にてこそ遠慮も隔てもあるべ  
けれ、同部七八名の中にて猶遠慮すと謂はるは  
猫シキなり、猶隔つと謂はるは天性に出づるな  
り、天性の猫シキは別として兎角談合協議に非

常の便宜を與ふるは掩ふべからざるにあらざるや  
談合協議の容易なるは輿論の源泉絶へざるを意  
味するにあらずや、輿論の源泉を有する社會は  
生命を有する社會なり、余が主眼とする所は他  
なき、半死の學寮に活ける生命を與ふるにある  
のみ、學寮にして生命あらんか舎監の訓令も能  
く行はれ、寮生の意見も能く通じ、爰に室長は寮  
生の兄舎監の長子と云ふの實學がり、校權を楯  
とて命令せずとも、放校を賭して抗争せずと  
も、和氣洋々の裡能く學寮の統括を全ふするこ  
とを得んか、暫く記えて學寮政治家の參考に供  
すと草々終りて懼然叱責を得つ、(完結)

(附言)飄然君よ、手近く奇靈な大黒でもあつ  
て相祈りにでも致えたらんには黑白分明な  
るかも知れずと雖も、互に水掛となりては  
余は讀者の迷惑を恐るゝや切なり、  
ドーセ余の議論にて事の定まるにあらず、  
君の反論にて事の破るゝにもあらざるべ  
ければ、余は以上の三篇を以て余の論とな  
え種々の不完全なる點をも殊更補ふことを爲  
さざるにより、君も以上に對して充分駁す

るのみにて満足せられたし、門外子に對し  
ても亦同様に御諄らめ有らんことを乞ふ、  
而も若し本案が萬一議決の効力を有する議  
題となりては、余は固より凡ての答辯を  
惜まざるなり、

### 紫洋君に向つて續々學寮五分 論の成功を祝す

飄然生

流石は紫洋君、法科生だけありて、政治的觀察は  
うまい。君が五分論は、今回の續々五分論(政治  
的觀察)に於て、はじめて其功を奏えたるものと  
僕は思ふ。續五分論はまづかつた。先頭第一に出  
た五分論は、君が一大失敗論だ、と云はざるを得  
ずだ。僕は前にも云つた通り、或は余が言の裏面  
に含まれて居た通り、或點までは、五分論を面白  
いと思つた、絶對的に打ちこわす積ではなかつ  
た。併し、君が第一に持ち出した論法には、一か  
ら十まで、大不賛成であつた。五分論の爲に取ら  
ざる所であつた。そこで攻撃の結果、分立の不可  
を絶叫えたが、余をして彼結論を生せしめたの  
は、君が前提の反動的結果であつた。第二續の五  
分論にては、君は少くも方向變換を行つて、前の

論法よりは少まゝ善きやうに見えたか、しかまゝ少しく其單位の取りやうを誤つたこと、その他の點に就ての非難を免れ難いことは、門外漢何某が衆目の觀る通り、云つた通り、僕は外に咎めたい點もあれど、一度門外漢もいつたのを、更に彼是といふのは餘り面白くもない、又衆人の倦厭を來す恐あるから、君がいふ所に賛同して、互の水かけ論をやめ、君がさきに僕に與へた、騎兵の妙用に得たり、との讃詞に酬ふるに、君は方向變換に巧なり、との讃詞を以てし、今回の君が論は方向變換といはんよりも、むしろ前へ高飛、若しくは、此正月におこつた、世紀の早飛に比して可ならんか、とも思はるれど、これが所謂、長大足の進歩と見ば、大に祝すべく又前二論に比して實に大なる成功をなしたのは、大に賀すべきであることを述べて、君と共に平和に穩かに樂まゝ、新天地の風雲を迎ふことゝ紫洋！

## 地方的團體

(其一)

(利益)

地方的感情。地方的團體。是久まゝ愛校者の腦漿を痛めたる問題にして、先には瘦骨生の、慷慨淋漓たる論難となり、今又紫洋生の學寮五分論

に於て、持て餘されたるが如き、以て如何に世問題が、會員諸君を苦めたるかを見るに足れり。抑も此地方的感情、及び團體なるものは、爾く不都合にまて、而かも有毒なるものなるか。夫れ、古昔同一藩主の下に在つて、多年等々く忠勤を勵みし、祖先の歴史的關係を有え、多年同一の風俗同一の習慣、同一の方言を借用し、同一縣下に在り、同一小學若くは中學に入り、舍を同うまゝ、食を共にして、多年の苦學を積み、今は百里故郷を去つて、遙遠此地に遊學するもの、相共に故郷を談じ、既往を語りて、僅かに旅情を慰むるものは其郷友有るが故なり。病氣其他の困難に際せ、相依り相扶けて、毫も不自由を感じざるもの、亦其の郷友有るが故なり。之なくんば、何に由てか旅情を慰め、將た誰に由てか孤身を護らん。然らば則ち是等郷友が、互に相集まりて俱樂部を組織するは、情に於て理に於て何の不都合か有らん。殊に是等の同郷的感情は、化えて他縣人に劣らぬ様と云ふ競争心となり、互に相勸誘して、學事に勉勵するの基となり。他縣人に耻かしからぬ様と云ふ敵愾心となりて、共に品性を正し、行

爲を慎しむの根元となる有らは、其利益舉げて云ふ可からざるなり。素より斯の如きは、龍南會員たるの義務とて、且つは、本校生徒たるの責任として、十分に行はざる可からざる、勸誘懲戒なりと雖とも、龍南會は大なる團體なり。學校は衆多の集合なり。大體に於て統括し、以て改善攻學の便利を計るに怠ると無しと雖とも、個人日常の品性行動に對て、十分の注意と、便益を與へ、勸誘と懲戒とを行ふことは、口云ふ可くして到底行はる可き事實に非ず。是故に、余は斷然之を以て、同郷學生の間に委任するの處れるに如かざることを信するものなり。況んや規則に依て之を導くと、情に由り理に發して之に従ふと、其効果何れか多少、言を待たずして明なるもの有るに於てをや。是故に、俱樂部なるものは、同郷學生相集まり、互に胸襟を開き、膝を交へて故郷を談し、既往を語る、夫の所謂俱樂部たるのみならず、相依り相扶けて、勸誘懲戒を行ふ、眞に愉快にして、而も利益有る團體なるに非ずや、斯く論する時は、人或は言はん。是亦等しく口云ふ可くして、實行す可からざる事なりと、見よ本校生

徒中、一般地方を概括して、品行方正、學事に謹勉なる生徒は、何れの地方より來り、如何なる俱樂部を有するか。醜聞紛々、怠惰身を誤まるの輩は、又何れの地方より來り、如何なる俱樂部を有するか。思ふて此に至らば、釋然たる所有るや必せり。夫の嚴正なる俱樂部を有し、時に殘るや必野蠻的とて評す可き制裁を有する生徒中、果て墮落耳を蔽ふ程の汚行有る輩を出せしと多きか。夫の有りて無きか如く、離々漫々、蕩とて制裁なく、誘導なき俱樂部を有せ、乃至有せざる生徒中、果して陋劣醜汚見るに忍ひざる程の行を爲えたるもの少きか。通町邊帽を被らず、袴を着せずして、夕暮軒下を通ひ行くものは如何なる生徒か。紺屋町上、獵帽「ステツキ」を携へ、黃八丈の下着に、黒紋附の羽織を着し、三三五五、揚々として南下するものは何處產の如何なる俱樂部を有するものに多きか。夫の孤身八重の潮路を越えて、遠く我儕に遊へるものに、斯かる墮落生の少からざるは、或は以て敗勦遁逃の落武者、多分を占むるか故なる可しと雖とも、亦以て同郷俱樂部の制裁を有せざるの不幸より出づ

るもの少からずと信ず。是に於てか、一二止むを得ざる事情により、孤身一知人なき異郷に來れる諸君に對ては、少しく不満足之感なきや否やを知らずと雖も、余は實に同郷俱樂部の必要止む可からざるを斷言せざるを得ず。而して前述孤客の諸君も、亦少しく範圍を大に之、奥羽俱樂部乃至關東俱樂部のものを構成するを勸告せざるを得ず。何となれば、かゝる團體は、構成する他に對するの競争心より、自然其團體的の觀念を生じ、團體的の觀念は、以上論述せるか如き利益を享有するに至る根元なればなり。(花仙)

## 地方的團體

(其二)

### 害毒

一利の在る所、一害亦從つて生ずるは、自然の趨勢にして、數の免かれざる所、地方的團體も亦、其操縱如何に由ては、害毒を流すこと少からざるなり。彼等が競争の精神は、卑屈なる腕力の闘争となり、敵愾の氣象は、陋劣なる嫉意の元氣となり、制裁地に墜ち、勸誘行はれず、惡あれば之を陰蔽きて、他縣人の吹聴を威壓せ、一人他縣人に不禮を蒙れば、蹶起牙を鳴らして、仇を復せんとするに至り、從つて或は縣を肩にして、暴慢無

禮を撒き散らし、或は俱樂部の袖下に匿れて、陋行を行ひ、甚まきは縣有るを知つて、學校有るを知らず、是となく非となく、之に由て固まり、任に耐へざる愚物を擔ぎ出きて、委員改選の機に乗し、負ぬ氣になりて、自から悟りながら、公會を數して、非を遂ぐるに至るの恐なくんはあらず。人或は之を以て、漫に政黨の現狀を廣愆したるものと爲すのも有るやも知れずと雖も、團體の變形、遂に其趣く所は則ち斯の如きのみ。同縣人の惡口を鳴らえたりとて、相方俱樂部間の交渉となり、遂に謝罪狀を出さしめたるが如きことはなきか。正々堂々の陣を張つて、公言公論す可き問題に對し、各縣旗色を異にし、陋劣卑屈、陰險聞くに忍びざる方術を以て、他を陥れ、事落着の後は、同縣人に對し、情實止むを得ざりしとて、揚々大言を擧げ、憚らざるが如きものはなきか。一人我縣人を辱めたりとて、數十人の間に取り込めて、野蠻的制裁を加へたるが如きことはなきか。一人他縣人に毆打されたりとて、數十の鄉黨、騒然とぞと首梃棒と噪ぎ立ち、詫び證文を得て、得々然たるものはなきか。他縣人に

無禮を働きたる郷友援護之、剩さへ之を優待好遇して、贈物すら呈きたるか如きことはなきか。縣と縣との交渉に當り、事實を陰蔽えて、偏頗執拗切りに我儘を主張して、止まざるか如きとはなかりきか。公然それきつたる虚を併へ、詐を陳きたる始末書を出し、恬然とえて耻つる所無かりしか如きことはなきか。幸にして本校未だ斯かる現象を見ずと云はば、吾人は實に大白を擧げて之を祝せざるを得ず。夫れ少壯の時代は、元氣旺盛、腕鳴り血湧くの時代なり。時に或は粗暴に陥るとなき能はずと雖も、單に所謂粗暴のみならず、左程慮るにも足らざるなり。然れども苦玄夫の詐僞百端、虚を吐き議を構へ、陰蔽淡泊ならざるが如きに至つては、決えて之を等閑に觀過す可きものに非ず。若玄果えて斯くの如くんは、地方的團體は、單に効果なきのみならず、其害毒、實に恐る可きもの有るなり (美)

(接後)

明治三十二年  
十二月 圖書增加表

備考	圖書部類																合計
	合計	雜書	叢書	類書	隨筆	產業	技術	兵學	醫學	理學	數學	地理	史傳	文學	社會學	哲學	
	三一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	五	部數冊數部數冊數部數冊數部數冊數
	二八	二七	三	一六	一	一	一	一	一	二	一	一	一	二六	一	五	八
	七	一	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一	二	二	一	
	七	六	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一	三	二	一	
	元	一	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一	四	二	五	
	一九〇	九	三	一六	一	一	一	一	一	五	一	一	一	二元	二	六	八



明治三十二年 圖書增加表

明治三十二年 生徒圖書閱覽表 (日數七十 六日間)

備考	圖書部類	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數	部數冊數
----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------